

真冬の二月下旬、重そうな雪が世田谷の家の庭を白く染めてくれた。樹齢八十年を超える赤松のやせ衰えた枝が積雪で折れそうに顔をゆがめている。二階のテラスから洗濯用の竿竹で突ける距離だ。

「竿竹持つてきてくれないかな」と、一朗。

「自分でそのくらいやりなさいよ」と、老妻・一子。自分でできることはやらせないと、呆けが進むと心得ているようだ。

竿竹の重さでよろつきながらもなんとか雪降ろしに挑戦。使い古して折れそうな竿竹も頑張つて雪を落としてくれると、一朗と同年の赤松君がほつとしたように顔ならぬ枝を上げてくれた。

「あら終わったのね、じゃあ次は外階段と一階の玄関前をやってちょうだい」と指令が飛ぶ。

子供たちが巣立ったあと、二階家の一階は三人の若い女性テナントに賃貸している。年金の足しにしているのだ。お嬢様たちの朝のご出勤までには、オーナーとしては玄関と家の前の道は除雪しておかねばならない。仲介してくれた不動産屋さんからは、除雪しなくて転んで怪我をすれば、オーナーが訴えられると脅されているのだ。

無言で単純な作業を続けているうちに、現役時代の札幌での単身赴任を思い出した。

北の大地の冬は厳しい、三十年余り前、五十歳で、航空会社の北海道支社の運営を任せられると、子育てなどの諸事情があつて単身赴任した。

支社長の社宅は、山の手の宮の森スキー場に近い新築マンションの二階にある三LDKだ。大手各社の店長レベルを対象にした三階建ての建物。外壁はレンガ模様で洒落ている。札幌駅に近く、ススキノには車なら十分余りで近い。バス停やコンビニも近い。

支社長クラスの単身赴任は各社とも二年から三年間が多い、運転手付きの社用車が自由に使える。居心地が良く、サッチョンの店長族は接待用の交際費が潤沢に支給されるから、赴任期間があまり長いと何かと問題が起きる。ナイトクラブやスナックのママさんたちと深い仲になり、離して貰えないのだ

「おぼんです…」、今晚は、いらっしやいませ。甘い声と着物やドレスから漂う

品の良い香水が身体を怪しくくすぐる。

航空会社の地方長といっても、接客でカウンターに立つわけではない、支社の管理業務は主幹の部下たちに任せればよいから、主なお仕事は、VIPの接客や、旅行代理店とか取引先との諸会合・接待などだ。これらに昼夜追われる。

飲み仲間とかゴルフ・麻雀・カラオケなどの遊び仲間は、同じサッチョン族の各業界の店長が多い、仕事と遊びでつながっているのだ。潤沢な接待費に恵まれているので、ススキノではちやほやされるから、店長クラスは接待漬けで身体を壊して任期半ばで内地に戻るケースも多い。ママさんと深い仲になり、それが拗れて、家庭崩壊、立身出世も立ち消えなどという話が飛び交うのは日常茶飯事だ。一朗も例外ではなかった。で、東京に戻ると、下腹部の潰瘍で大手術した。

通い慣れた店では、閉店までいて、それからママさんと打ち上げをやって、マンションに戻る。

その当時を川柳で謳えば、「北の夜、湯たんぼ代わりの白い肌」となるかもしれない。そんなことが家庭騒動に発展した噂が面白おかしく拡がり、サッチョン仲間では途切れなかった。自慢話に聴こえなくもないのだから罪な話ではある。そういえば、所属する卒サラ物書き集団の川柳部会で、その昔一朗が詠んだ句が珍しく秀句に選ばれたことがあった。「捨てられぬ 女の香り残る鍵」

そんなことをうつらうつら思い浮かべるうちに、布団が温まってきたようだ。「温むのに合わせてまぶた深くたれ」

一人部屋で寝かせるのは危ないというわけで、八畳間には海外勤務時代のセミダブルベッドが間を置いて二台並んでいる。

八十歳の高齢者夫婦だから、イビキなどの問題もあり、別々の部屋で寝たらよいのだろうが、同じ部屋で寝ないと何があるかわからないので心配なのだ。

夜中に二度はトイレに行くためにベッドから降りるのだが、ふらついて床に倒れたりするから危ないのだ。

……と、綴っているうちに指の動きが鈍くなってきた。ワープロを叩く指が纏れて、ミスが重なる。

“…and now, the end is near, but then again I am not certain…”と、フランク・シナトラの甘いメロディが心地よく耳に流れ始めた。

窓の外は黒い空から白い小雪がぱらついているようだ。明日はまた雪かきのお仕事が待っているだろうから、早寝せねばなるまい。

夕食が終わると、スイッチをONにしておいた電気毛布が温まっている頃だろう。今日はここまでにします。オヤスミナサイ！（完）